

オープンサイエンス時代の研究データを哲学する

榎本 啄杜 (Takuto Enomoto)

大阪大学 社会技術共創研究センター

科学の透明性や成果物等へのアクセス向上を目的とする「オープンサイエンス」(以下、OS)を遂行するにあたっては、データを上手く取り扱うことが重要である。しかし、実際の研究やデータ管理の現場では何をもってデータと捉えるかについての解釈に揺れがあり、しばしば混乱の元となっている。OSの中心的概念である「オープン (open; openness)」が曖昧であることに負けず劣らず、「データ (data)」概念もまた曖昧である。

ところで、科学についての哲学である科学哲学は、「オープンであることが望ましいとされる科学」についての哲学でもあるはずだ。そこで思いつくのは、科学哲学(や情報の哲学のような関連分野)において伝統的に語られてきたデータ概念を参照し、OSにおけるデータ概念の解釈に利用するという作戦である。ところが本発表内でも確認するように、OSでは共有資源としての側面、そして科学哲学では確証性としての側面をそれぞれ重視していることもあり、両者の間にはデータの理解において概念的ギャップが存在すると考えられる。

本発表ではこうしたOSと科学哲学のギャップを踏まえ、両者の文脈で求められる「データ」の性質や機能を再検討し、それらを整理し直すことによって、OS時代におけるデータ概念を再構築する可能性を提示する。この作業を通じて、OSの推進やデータ管理の実務に科学哲学的な知見を反映させ、OSが科学にとって持つ意義と、その一方で孕む課題を改めて問い直すことを目指す。